

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500310

研究課題名(和文) 地域間コミュニケーションを通じたコミユナルな地域文化の情報発信に関する実践的研究

研究課題名(英文) Practical research on dissemination of communal culture by inter-area communication

研究代表者

北村 順生 (Kitamura, Yorio)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20334641

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、実践型教育研究プログラム「ローカルの不思議」プロジェクトを通じて、自らが居住する地域について、画一的なステレオタイプを克服して新たな地域イメージを再発見・再認識していくプロセスについて明らかにした。とくに、地域の図書館や博物館、地域メディア、あるいは地域の市民活動団体などとの間で連携を行い、地域文化について認識を深めていく方法について明らかにした。

さらに、地域間交流の方法論として、SNSや映像投稿サイトを活用したコミュニケーション・プログラムについて検証を行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, we have surveyed process that students re-discover and re-appreciate new local images, conquering uniform stereotypes, through practical research and education program "Mystery of Local". Especially, we have collaborated with public library and museum, local media, civic-activities group and deepened the recognition about local culture.

Furthermore, we have tried new communication methods like SNS and video hosting service, in order to develop tools for exchange between different areas.

研究分野：情報学

科研費の分科・細目：図書館情報・人文社会情報学

キーワード：情報社会学 メディアリテラシー 異文化コミュニケーション ローカルの不思議 地域間交流 地域イメージ ステレオタイプ

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景として、4つの点がある。

第一に、マスメディアを通じた地域イメージのステレオタイプの広がりだ。日本では東京一極に集中したメディア産業の構造の中、地方文化については表象される割合が極端に少ないか、取り扱われるとしても中央＝東京からのステレオタイプの視点到に絡め取られた画一的なものに陥りがちである。

第二に、近年における地域メディアや市民参加型メディアの展開だ。ケーブルテレビ等でのパブリック・アクセスの展開や非営利法人を含めたコミュニティ放送の増加、ブログやSNSなどのインターネットを用いた個人による情報発信など、従来のマスメディア型コミュニケーションとは異なる多様なメディア活動が活発化している。

第三に、上記のような状況を踏まえて実施してきた、地域間コミュニケーションに関する交流実践の蓄積だ。研究代表者および研究分担者らのグループでは、2001年度より地域間コミュニケーションについての実践型教育研究プログラム「ローカルの不思議」を継続的に実施してきた。これは全国の大学生や高校生の間で展開される交流授業のプログラムであるが、相手地域に対して抱いている地域イメージのステレオタイプの歪みを意識化した上で、自らの暮らす地域の実情を地域からの視点によって捉えた映像作品を制作・交流し、オルタナティブな地域文化の交流を図るという活動である。

そして第四に、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響である。東日本大震災に関しては、マスメディアを通じて全国、そして全世界に伝えられた。しかし、その報道の内容は、東京を中心とした被災地外の視点に枠づけられたものであり、被災地内の実情や実感とはかけ離れたものであった。こうした報道に関する被災地内外の温度差は、外部からの視点に影響されつつ形成される地域イメージと通底する問題を内包しているといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的として、大きく3点があげられる。

第一に、新たな地域イメージの再発見・再認識に関する実践研究である。地域文化に関するナショナルで画一的なステレオタイプを克服しつつ、地域の視点に根差した地域文化の自己像を形成していくためには、具体的にどのような方策が可能であるのか、逆にどのような課題があるのかを実践的に明らかにしていく。

第二に、地域間コミュニケーションに関するプログラムのデザインである。ステレオタイプの地域イメージとは異なる新たな地域イメージを、他地域との間で相互に交流していくためのコミュニケーション回路のあり方について明らかにしていく。これまでの

「ローカルの不思議」プロジェクトでは、基本的に教室という空間に限定された学校間・学生間の交流にとどまっていたが、キャンパスを越えたより広範な人々を巻き込んだ交流の可能性について実践的に検証していく。

第三に、東日本大震災の発生以降に生じた被災地内外の認識ギャップを架橋するための方策についての実践的な検証である。被災地の外部から被災地を視るまなざしは、マスメディアによるセンセーショナルな報道等に影響されており、被災地の実情や実感とはズレが生じている。こうしたギャップを是正し、被災地の内部と外部とを直接的につないで相互の理解を促していくような方策について明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、主に2つの実践的な教育研究プロジェクトの実施によって実施される。一つ目は、地域間コミュニケーションについての実践型教育研究プログラム「ローカルの不思議」の実施である。具体的には、参加学生たちが自らの地域について調べて映像の形態に表現していく際に、地域の図書館や博物館、地域メディアなど、の地域のさまざまな団体や組織と連携していく。本研究では従来のように教室内に閉じられた活動ではなく、地域社会に開かれた活動を通じて地域文化の理解を進めていくことで、実際にどのような団体とどのような連携を行うことが、どのような地域文化の学びへとつながり、どのような地域イメージの再認識をもたらすのかを明らかにしていく。

二つ目のプロジェクトは、東日本大震災による被災地の外部と内部とをつなぐメディア実践「Bridge! Media 311」プロジェクトである。本プロジェクトは「ローカルの不思議」プロジェクトの発展形として捉えられる。被災地の外部における被災地とのつながりや災害をめぐる地域の集団的記憶など、災害という観点から見たそれぞれの地域の特徴を映像等に表現して、被災地の内部へと伝えていく活動を最初に行う。その一方で、被災地外からの学生たちが被災地を訪れ、自分たちの目で見た被災地の状況を被災地の外部へと伝えていく活動を通じて、画一的な視点による被災地に関する表象を相対化していく視点の獲得を実践する。

4. 研究成果

以下、本研究の成果として、2つの教育研究実践である「ローカルの不思議」プロジェクトと「Bridge! Media 311」プロジェクトについて、そして両プロジェクトに共通する問題として交流プログラムのデザインについて記載する。

(1) 「ローカルの不思議」プロジェクトプロジェクトの概要

「ローカルの不思議」プロジェクトは、メディアリテラシーと地域の文化表象について体験的に学ぶ教育研究カリキュラムであり、全国各地の学生や生徒が自らの地域についてのクイズ映像を制作し、相互に交換、交流することで、地域イメージの特徴や問題点について明らかにするものである。

その背景としては、現在のマスメディア環境が東京一極集中の産業構造によりなりたっており、地域の表象も基本的に中央＝東京からの視点に強く影響されたものであることがあげられる。そのため、地域の表象は画一的なステレオタイプに沿った形のものが広まっていると言える。本プロジェクトは、こうした現状を再認識し、オルタナティブな表現の可能性を実践的に明らかにするものである。

プロジェクトの手順

プロジェクトの最初の段階では、学生たちは交流先の相手地域に対して抱くイメージを、一枚の白紙上にキーワードの形でマッピングする。こうして作成した「イメージ・マップ」上には、交流相手先の地域に関するイメージが可視化される。中には、相手地域に対する誤解や偏見、ステレオタイプも含まれており、こうした地域イメージの可視化を経て、参加者たちは地域の文化表象の問題について意識するようになる。

第二段階では、このイメージ・マップを交流相手校と相互に交換する。自分たちが地域に対して抱いていたセルフ・イメージと、他者のまなざしによって可視化された地域イメージとのギャップを目のあたりにして、参加者たちがショックを受けることも少なくない。

このイメージ・マップのもう一つ仕掛けとして、マップ上に個々のイメージを記入する際に、そのイメージが主にどの情報源から得たものなのかを思い起こし、色を使い分けて記入することになっている。そのため、完成したイメージ・マップを見ると、地域イメージのステレオタイプが、どのような経路を経てもたらされたのかが明確になる。口コミや実体験、インターネット情報などの複数の情報経路の中で、マスメディアが与える影響は非常に大きい。教科書や授業などの学校教育が与える影響と並び、テレビや新聞などのマスメディアによってもたらされる情報が、各地域で地域イメージの形成に大きな影響を与えていることが分かる。

こうして他者からの地域イメージを認識した上で、次の段階で学生たちは自分たちの地域を主にクイズ映像の形で表現していく。メディア表象の中で氾濫するステレオタイプを意識しつつ、その画一的なイメージに対抗する地域の姿を伝えたり、逆にステレオタイプをより深く掘り下げていこうと工夫する。

そして最後の段階で、それぞれの学生たち

が作成した映像を交換し視聴し合う。対面上の直接交流やネット上での交流など手法はさまざまであるが、映像だけではうまく表現しきれなかった部分の言葉を補いながら、各地域についての理解を深めていく。

プロジェクトの知見

本研究においては、これまで実施してきた「ローカルの不思議」プロジェクトをより発展させていくために、大学や高校などの教室内に留まらずに、地域に存在する学外の諸機関との連携を積極的に行い、参加者たちが地域文化の理解や認識をより深めていくよう試みた。図書館や博物館などの公共施設や地域メディアなどを活用し、自らの地域の再発見や再認識に役立てていくことができた

そうした連携の中でとりわけ有効であったのは、地域の映像アーカイブの活用である。地域の文化的遺産を蓄積する機関としては、図書館や文書館などが一般的である。ただし、これらの機関で所蔵されているのは基本的に文字資料であるが、それらを理解するためには前提となる一定の知識や文脈の理解が必要となる。一方で、映像資料は直感的に地域文化を理解しやすいという特性がある。もちろん、各々の映像資料の背景をきちんと理解しないと、思わぬ誤解をする可能性もあるので注意は必要ではある。現在、各地で地域の映像資料をアーカイブとして蓄積しているという試みが広がりつつあるが、こうしたアーカイブの有効的な活用という観点からも、学生や生徒による地域文化の捉え直しに向けて地域の映像アーカイブを利用していくことは、今後、さらに重要になっていくものと思われる。

(2) 「Bridge! Media 311」プロジェクト

プロジェクトの概要

「Bridge! Media 311」プロジェクトは、「ローカルの不思議」プロジェクトの知見を踏まえつつ、東日本大震災後の被災地の表象のあり方について批判的に捉え直していく実践プロジェクトである。被災地外の学生が震災や災害と地域との関係について調べ、映像として被災地の内部の人々に伝えていく。その一方で、被災地外の学生たちは被災地を訪れて自らの目で現状を確かめ、映像や音声などの形で地元の人々へと伝えていく活動を行う。

マスメディアを中心とした被災地の表象が、外部からの視線によるセンセーショナルな内容や画一的なストーリーに沿ったものになりがちであることに対抗して、自分自身の目で見た被災地の状況を被災地外の人々へとメディア表現により伝えていくという実践的活動である。

プロジェクトの手順

まず最初の段階で、被災地外の学生たちは自分たちの地域と災害との関係について調

査を行い、その結果を主に映像の形にして表現していく。地域と災害との関係の内容は多様であり、東日本大震災の被災者向け支援活動に着目したものや、過去に発生した災害に対する地域における集団的な記憶を取り上げたものなどもあった。いずれにせよ、こうした内容は、災害や震災という観点からみた各地域の持つ特徴であり、それまではなかなか意識化されることのなかった地域のあり方について、再認識するきっかけとなったと言える。

次の段階では、そうして作成した各地域の映像を、被災地に住む学生や人々に見てもらう。この際に、被災地で多数作成されつつある映像アーカイブへ資料として登録する場合もある。被災地の人々にとって、被災地外の災害との関係についてはあまり知られていないことであり、被災地外の状況を被災地内へと伝えていくという意味がある。

被災地外の学生たちは、次には被災地に足を運び、被災地の現状について確認するとともに、実際に被災者とも直接触れ合い、その話を聞く。それまでマスメディア等で知っていた被災地の状況、あるいは時期がたってマスメディアでは滅多に触れられなくなってしまった被災地の生の状況について、自分の目と耳で知り、深く理解する。

その上で、地元の地域に被災地の現状を伝えるためのメディア表現を行っていく。その表現形式は地元伝えていく際に利用するメディアによって異なるが、通常の映像形式にまとめる場合もあり、ラジオでの放送のために音声にまとめていく場合もある。また、ごく簡単なスライドショーの形式であるデジタル・ストーリーテリングの形にまとめる場合もある。

最後に、自分たちが各種のメディア表現にまとめた被災地の状況について、地元の被災地外の人々へと伝えていく。

プロジェクトの知見

「Bridge! Media 311」プロジェクトを実践して明らかになったことは、マスメディア等で報じられる東日本大震災の被災地の描かれ方は、センセーショナルな映像や感動を強調するセンチメンタルな表現などに集中しがちで、被災者の実感やリアリティとの間でギャップが生じていることが少なくないことである。こうした背景には、「ローカルの不思議」プロジェクトで問題にしたのと同様に、東京を中心とした中央一極型のマスメディアの産業構造があり、東京からの視点によって被災地を理解しがちであるという問題がある。

そのため、学生たちが被災地を訪れて、実際に自らの五感を通じて被災地の実情を知り、その状況を伝えていこうとする時に、大きな驚きや戸惑い、逡巡が生じることになる。マスメディアを通して広く流通する被災地に関する表現に対して、地域から地域へと直

接むすぶオルタナティブなメディア表現がなされる可能性があると言える。

また、逆に被災地外の状況を被災地の中の人々に伝えていくという活動の意義も確認された。大災害の発生後は、被災地は常に報じられる側に押しやられてしまい、被災地に向けて伝えていくという意識は希薄になりがちである。しかし、各地で行われている過去の被災経験をもとにした被災地への支援活動の様子を伝えていくことは、被災地の外部と内部とをつなげていくためにも意義は大きい。とくに、震災発生後に一定の時間が経過し、マスメディアで報道される分量も減りつつある中で、被災者たちは自分たちだけが周囲から取り残されてしまうのではないかという懸念を抱きがちである。こうした状況の中で、被災地とつながりを保ち続けようとする外部の活動を知らせることは、地域間の信頼関係を保つためにも重要であると言える。

(3)交流プログラムのデザイン

本研究においては、交流プログラムの実施に際して各種のツールを活用したさまざまなプログラム・デザインの開発も行った。その中で、とくに顕著な成果のあったタブレット端末の活用と SNS サービスの活用について以下にまとめる。

タブレット端末の活用

タブレット端末は、教育現場での活用が広まりつつあるが、「Bridge! Media 311」プロジェクトの実施に際して、一人1台の活用を試行した。

タブレット端末の特徴として、オール・イン・ワンとして複数の高度の機能が一つの端末で可能である点や、比較的簡単かつ直感的に操作が可能である点、容易に持ち運びできる点などがあげられる。こうした特徴を有効に活用すると、タブレット端末を用いて自らの活動を振り返ったり、自ら感じたことをすぐに映像や音声の形で表現することが可能になるなど、個人レベルでの能力を拡張させていくことができる。本プロジェクトの中では、被災地の状況をスライドショー形式のデジタル・ストーリーテリングの様式にまとめる形をとったが、こうした個人での思考や表現活動を支援するのに、タブレット端末は非常に有効なツールであると言える。

一方で問題として、タブレット端末を活用するとどうしても活動が個人レベルに留まりがちになってしまう点がある。こうした問題を克服するためには、個人の活動をグループ活動へと展開させていき、認識や感情を他者と交流させていく仕掛けを設けたり、タブレット端末を活用しつつグループ活動を可能としていくようなアプリケーションの開発が必要となると思われる。

SNS の活用

近年の SNS の普及は目覚ましいものがあるが、「ローカルの不思議」プロジェクトにおいても地域間交流の一環として SNS を活用した。とくに facebook のグループ機能を利用した。

その結果、プロジェクトの参加学生たちは自由にコメントを発することができ、交流が活発化したことが指摘できる。とくに、プロジェクトの初期段階から SNS を利用できるようにすると、従来のように対面交流やスカイプを活用したネット交流を行う特定の時間だけではなく、プロジェクトの全般を通じて交流を行うことが可能となった。このため、時間が経過するにつれて交流もより深まり、最終的な相互理解の程度も高まった。

また、facebook は Youtube などの映像投稿サービス等との連携が比較的容易である。そのため、映像の交換を伴うような本プロジェクトの実施においては、従来のように映像パッケージの郵送による交換や重い動画データデータの交換が不要となり、交流をスムーズに進めることができる。

一方で問題として、各種の SNS は参加者が日常的に利用しているものであり、その一角にプロジェクトの交流活動が紛れ込んでしまうと、交流の特異性が消え去ってしまい、SNS 空間の他のコンテンツの中で埋没してしまう危険性もある。

また、利用者によっては SNS の利用がスマートフォンなどのモバイル端末によって行われる場合も多いが、サイズの小さなモニタは映像の視聴環境としては限定的であり、せつかくの映像表現が十分に伝わらない危険性もある。この点については、内容に応じた利用端末を選択するなどの注意喚起が必要となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

茂木一司・藤原秀博「遠足プロジェクト：震災アートプロジェクトの実践」『群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編』査読有、第 49 巻、2014、pp.33-54

宮田雅子「地域におけるコミュニケーションデザインとしての『ピクニック』」『札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部紀要』査読無、第 44 巻、2014、pp.11-22

北村順生「「新潟」という地域イメージについての一考察：地域間交流授業「ローカルの不思議」プロジェクトの実践から」『人文科学研究』新潟大学人文学部、査読無、第 132 巻、2013、pp.41-55

北村順生「社会情報学と地域メディア」『社会情報学』社会情報学会、査読無、第 1 巻 3 号、2013、pp.17-23

坂田邦子「東日本大震災から考えるメディアとサバルタニティ」『マス・コミュニケー

ション研究』日本マス・コミュニケーション学会、査読無、2013、pp.67-87

坂田邦子・小川明子・崔銀姫・土屋祐子・川上隆史「地域イメージにおけるステレオタイプの考察：地域間交流学習「ローカルの不思議」の実践事例から」『社会情報学研究』日本社会情報学会、査読有、第 15 巻 1 号、2011、pp.51-64

〔学会発表〕(計 19 件)

北村順生・土屋祐子・岩崎千晶・岡田朋之「おらが地域を物語る 実践！あなたもできるローカルの語り方」『地方の時代』映像祭ワークショップ 3、2013 年 11 月 17 日、関西大学

宮田雅子「参加者の協働により地域のイメージを創出するデザイン方法論の研究」日本基礎造形学会札幌大会、2013 年 9 月 23 日、札幌市教育文化会館

TSUCHIYA, Yuko & KITAMURA, Yorio, 'Making digital stories by tablet devices to connect thoughts for earthquake disaster recovery: A study from Bridge! Media 311 project', International Conference for Media in Education, Aug.11,2013, Nihon Fukushi University

宮田雅子「地域のイメージを共有するためのメディア・デザイン実践」日本デザイン学会、2013 年 6 月 22 日、筑波大学

坂田邦子「失われる被災地コミュニティに、地域 SNS を導入する社会情報学的挑戦」社会情報学会シンポジウム、2013 年 6 月 8 日、中央大学駿河台記念館

SAKATA, Kuniko, 'Current Trend of Archiving Projects', International Conference "Opportunities and Challenges of Participatory Digital Archives, Jan.1, 2013, Harvard University

北村順生「被災地の内と外をつなぐメディア実践型の地域間交流プロジェクトの試み：「Bridge! Media 311」プロジェクト」日本教育メディア学会、2012 年 9 月 1 日、東北学院大学

坂田邦子「ポスト 3.11 における「当事者性」をめぐって」カルチュラル・スタディーズ学会、2012 年 7 月 15 日、広島女学院大学

宮田雅子「メディアリテラシー実践「ローカルの不思議」の情報デザインへの展開の可能性：札幌の地域イメージの交換の例から」日本デザイン学会、2012 年 6 月 23 日、札幌市立大学

坂田邦子「東日本大震災から考えるメディアとサバルタニティ」日本マス・コミュニケーション学会(招待講演)、2012 年 6 月 3 日、宮崎公立大学

北村順生「ローカルの不思議プロジェクトの活動について」メル・エキスポ 2012、2012 年 3 月 10 日、東京大学

崔銀姫・北村順生・坂田邦子「震災報道の地域比較」日本マス・コミュニケーション学

会・韓国言論学会 日韓国際シンポジウム、
2011年9月17日、ソウル中央大学(韓国)
坂田邦子「被災地の中からみた災害情報」
日本災害情報学会避難研究会ワークショップ、
2011年4月16日、東京大学

〔図書〕(計 2件)

原田健一・石井仁志・北村順生・他10名、
学文社、『懐かしさは未来とともにやってくる：
地域映像アーカイブの理論と実際』、2013、
pp.231-246

川上隆史・他編著、昭和堂『大学的広島ガ
イド：こだわりの歩き方』2012、pp.359-373

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.local-mysteries.net/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 順生 (KITAMURA, Yorio)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：20334641

(2) 研究分担者

茂木 一司 (MOGI, Kazushi)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：30145445

小川 明子 (OGAWA, Akiko)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：00351156

坂田 邦子 (SAKATA, Kuniko)

東北大学・情報科学研究科・講師

研究者番号：90376608

稲垣 忠 (INAGAKI, Tadashi)

東北学院大学・教養学部・准教授

研究者番号：70364396

崔 銀姫 (CHOI, Eunhee)

佛光大学・社会学部・准教授

研究者番号：30364277

土屋 祐子 (TSUCHIYA, Yuko)

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：80458942

宮田 雅子 (MIYATA, Masako)

札幌大谷大学・芸術学部・講師

研究者番号：20431976

川上 隆史 (KAWAKAMI, Takashi)

広島国際大学・心理科学部・准教授

研究者番号：00341222